A LUC BESSON FILM

LEON

JEAN RENO GARY OLDMAN NATALIE PORTMAN DANNY AIELLO




12才の女の子に愛された殺し屋、レオン。
1994年／アメリカ映画
製作：ゴーモン／レ・フィルム・デュ・ドーファン・プロダクション
C1994 GAUMONT／LES FILMS DU DAUPHIN
提供：日本ビクター／日本ヘラルド映画　配給：日本ヘラルド映画
HERALD
上映時間：１時間51分



A LUC BESSON FILM

LEON

JEAN RENO GARY OLDMAN NATALIE PORTMAN DANNY AIELLO

レオン

凶暴な純愛。

LEON



INTRODUCTION

『グラン・ブルー』『ニキータ』で多くの人々の心を捉えたリュック・ベッソン監督待望の最新作『レオン』が完成した。

レオン　完璧に仕事を遂行するニューヨーク一番の殺し屋。あらゆる感情を排し、一日２パックの牛乳とトレーニングを欠かさず、自分と同じ様に根を張る事のない鉢植えの観葉植物に水を与えることだけを唯一の楽しみとし、“女と子供は殺らない”というルールを守り続ける男。この寡黙な男の元に悪徳警官に家族を虐殺された12歳の少女マチルダが助けを求めて逃げ込んでくる。復讐を誓う少女と、彼女を守ろうとするレオン。父娘のような優しさといたわりが激情の愛に変わった時、二人の前には宿命の闘いが待ち受けていた…。

ニューヨークを舞台に、闘うことしか知らなかった一人の男と、まるで娘の様な少女との、不器用な、しかし純粋な愛を、迫力あるアクションを織り込みながら描く本作は、“凶暴な純愛”を描くベッソン最高傑作だ。

『ニキータ』での掃除人、ヴィクトールの役柄に惚れ込み、ジャン・レノのためにベッソン自ら書き下ろしたというこの映画は、完璧な配役とベッソン作品には欠かせないエリック・セラの音楽とのコラボレーションで、スクリーンにベッソンならではの映像世界を創りだすことに見事成功している。

また本作はベッソンのワールド・ワイドな製作進出作であり、11月18日の全米公開での好成績が話題を呼んだが、一足早く９月14日に公開されたフランスでもそれまでのベッソン作品に比しても驚異的な数字で大ヒットを記録し、熱狂的な支持を受けた。

主人公レオンにはベッソン映画では常に重要な役柄を演じ、鮮烈な印象を残してきた個性派俳優ジャン・レノ、相手役のマチルダには2,000人以上に及ぶオーディションの結果、ベッソンに彼女しかいないと云わしめたナタリー・ポートマンが大抜擢され、極悪非道な汚職警官には鬼才ゲイリー・オールドマン、そしてダニー・アイエロがニューヨークの裏の世界に通じる男トニーを演じている。

撮影は1993年の６月１日から、屋外シーンをニューヨークのロケーションで撮影し、屋内のシーンはパリで1993年10月７日まで撮影された。



STORY

ニューヨーク、リトル・イタリーの古びたレストランでレオン（ジャン・レノ）は新しい仕事の依頼を受けていた。この店の主人トニー（ダニー・アイエロ）は、レオンが小さい時から手塩にかけ、彼を“完璧な殺し屋”に作り上げた男だ。レオンは確実に、無情に仕事を遂行する。その日も幾人もの手下を虐殺し、マフィアのボスを追い詰めた。そんな彼の日課は一日２パックの牛乳とトレーニング。唯一の楽しみは安アパートで自分と同じ様に根っこを持たない鉢植えの観葉植物に水を与える事だった。

レオンの隣の部屋に住む12歳の少女マチルダ（ナタリー・ポートマン）もまた、孤独な少女だった。家族から疎ましがられ、タバコを吸うこの少女に、生傷が絶える事はなかった。その日もマチルダは廊下で父と見知らぬ誰かの争いが終わるのを待っていた。その客人、スタンフィールド（ゲイリー・オールドマン）と彼の部下達は、マチルダの父が彼らのヘロインを掠め取ったと云い、翌日正午までに消えた分を探し出せと告げて帰る。

あくる日、買い物に出かけたマチルダの留守中、スタンフィールドはマシンガンを手にアパートに戻ってきた。裏切りの代償は死。たった４歳のマチルダの弟も含め、ヒステリックな叫び声をあげながら家族を虐殺していった。ちょうど帰ってきたマチルダは涙をこらえながら部屋を通り過ぎると、レオンの部屋のドアベルを鳴らし続けた。

突然の訪問者にとまどうレオンに、マチルダはしばらく匿ってほしいと頼む。さらにレオンが殺し屋であることを知った彼女は、大好きな弟を殺した男に復讐するために、自分も殺し屋になりたいと懇願する。始めは断っていたレオンだが、自分の秘密を知った少女を殺す事も、又 追い出す事も出来ずに、奇妙な共同生活を始める事になる。

安ホテルに移り住んだ二人は、重く閉ざされた心の扉を互いに開き始める。レオンが少女に殺しのテクニックとセオリー“女と子供は殺らない”を教え、少女がレオンに読み書きを教える。逆境の中で育ってきたマチルダと闘う事しか知らなかったレオンの間には、父娘とも恋人のそれともつかない新しい感情が芽生えていく。初めて誰かの為に何かをしたくなったと話すレオンに、トニーは危険な未来を感じ取る。

そんなある日、マチルダは偶然スタンフィールドの正体を突き止める。彼は麻薬取締局の汚職捜査官だったのだ。仕事で傷を負って帰ってきたレオンの不器用な思いやりの陰で、マチルダは復讐を固く決意する。そしてレオンのいない間にスタンフィールドをつけ狙うが、逆に取り押えられてしまうのだった。レオンが駆けつけ救い出すが、これがスタンフィールドの執拗な怒りに火をつける事になる。トニーを通じてレオンの居場所を突き止めたスタンフィールドは、何百という警官隊を伴い出撃する。完全包囲されたホテルの狭い部屋で、レオンとマチルダの最後の闘いが始まろうとしていた…。

鉄分 I

●荒川洋治

わたしは現実を見たことがない。それは、わたしが新鮮な牛乳だから。鉢植えだから。廊下だから。それは攻撃ではない。ただ物を運ぶ、風貌です。鉄砲の玉がただ風を運ぶように。世界はかつては現実であり、新鮮な牛乳でした。鉢植えでした。青い空をうつす水のなかにあった。目をこすりたくなるほどきれいに。乱れた、だが清新なベートーベンについての意見。麻薬をきしませながら意見はいつも鮮やかです。誰かは一度、命よりも音楽を愛したことがある。いけないことですか。いいえ、これも攻撃ではありません。廊下です。ただの廊下。壁のふれないところを選んで、建物のなかの、人間の相談の声が通過する。



鉄分 II

無音のミルク、鉢植えが運ばれていきます。それは十分なものでも楽しめるものでもない。よい人とわるい人のあいだを、何度も折り返す事実の風貌です。廊下は走る。冷たい風を興し、人間をつかみそこねた、もうどうしようもない愛の壁に絞られて。ごくごくと、2パックの鉄分が、のどの崖を通りぬけるとき、誰かとわたしのバランスだけが、夢のようにあふれていきます。誰かがわたしを楽しむように。命がどこかを、忘れるまでに。新聞を読みましたか。現実がまた火曜日あたりに生まれたのを知りましたか。知りません。わたしは椅子にこしかけたまま、眠っている風貌だからです。あなたはこんなに黙ったまま、なんという形をとっている。


LEON



JEAN RENO
as LEON
レオン：ジャン・レノ

旅行が好きで、古くからの友人ベッソンと一緒にニューヨークに住んで仕事が出来ることに魅力を感じてOKしたという彼は、『最後の戦い』(83) 以降『サブウェイ』(84)、『グラン・ブルー』(88)、『ニキータ』(90)とベッソン監督作品で独特な存在感を示してきた。日本では『グラン・ブルー』のエンゾ役（セザール賞助演男優賞ノミネート）で一躍人気を集めているが、本国でも『おかしなおかしな訪問者』(92)の爆発的大ヒットで押しも押されぬ大スターの地位を確立した。

1948年、モロッコのカサブランカでスペイン人の両親の元に生まれ、高校卒業後、政府の支援する演劇学校に入学、70年にはパリの有名な演劇学校 Cours Rene Simonw で勉強を始める。 74年 Andreas Voutsinas 主宰のアクターズ・スタジオのワークショップに参加後、TV番組での役を手に入れ、TV、舞台と活躍を始める。

『いつでも、どんな時でも、常にアクションと感情と愛情を盛り込んで脚本を書き、撮影をするというのが、リュック・ベッソンのやり方』と評し、大きな信頼を寄せているベッソン監督との本作は、レノにとっても監督にとっても初のアメリカ映画となる。以降レノはバーナード・ノウアー監督の "On The Road Again" やローレンス・カスダン監督の "Paris Match" が控えている。



NATALIE PORTMAN
as MATILDA
マチルダ：ナタリー・ポートマン

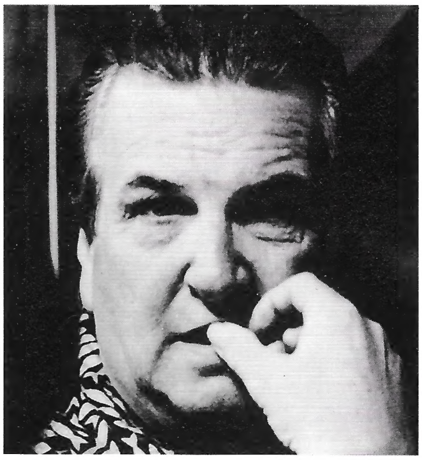
「彼女は映画初出演なのに、本当に見事だった。僕が説明し、彼女はそれを聞く。そして完璧にやりこなす。しかも終わった途端にやっていたことを忘れ、セットから出ていくとごく普通の12歳の少女らしく遊ぶのです。驚きでしたよ。」とベッソン監督が語るナタリーは全世界にわたる2,000名の候補者の中から、監督自身に見出された。彼女も、自分が演じるマチルダとジャン・レノ演じるレオンの関係を「彼女は12歳の身体をした大人で、レオンは40歳の身体をした12歳なの」と語るように、12歳の少女らしさと12歳とは思えない女らしさを見事に表現している。

1981年、6月9日生まれ。趣味は読書、物を書くこと、ダンスをすることという彼女はニューヨークで医者の父とアーティストの母のもとに生まれ、将来はアイビーリーグを目指したいという13歳の才女である。



GARY OLDMAN
as STANFIELD
スタンフィールド：ゲイリー・オールドマン

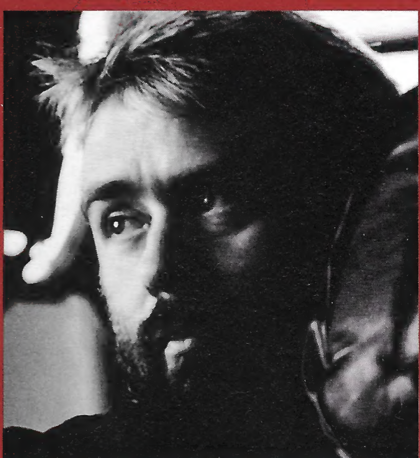
1958年、ロンドンのニュークロスに生まれる。いくつかの仕事についた後、演劇を志し、演劇学校に入学し地方劇団の舞台でデビュー。ロンドンのロイヤル・コート・シアターといった現代劇を始め、ロイヤル・シェークスピア劇団とも共演する等数々の舞台で注目を浴び、86年にはタイム・アクト・シアター賞を受賞している。同86年にはアレックス・コックス監督の『シド・アンド・ナンシー』で実在のロッカー、シド・ビシャスの麻薬とセックスに溺れて行く狂気の姿を演じ、批評家の絶賛を浴びた。これをきっかけにスティーブン・フリアーズ監督『プリック・アップ』(87)、ニコラス・ローグ監督『トラック29～天国列車で行こう～』(89) 等個性派監督にキャスティングされ、その期待に見事に応え、強烈な存在感を発散させる。そして91年には全世界で社会現象ともなったオリバー・ストーン監督『JFK』でリー・ハーヴェイ・オズワルド役を、翌92年にはフランシス・フォード・コッポラ監督『ドラキュラ』では愛に飢えた吸血鬼役とたて続けに話題作に出演し、なみいる他の出演陣を圧倒してしまう演技で俳優としての名声を確立した。その後も『トゥルー・ロマンス』(93、トニー・スコット)、『蜘蛛女』(94、ピーター・メダック) と確実に実績を残し、どんな作風の作品でも主役を演じることの出来る個性派俳優として、多くの監督達から出演依頼が絶えない。最新作では "Immortal Beloved" でベートーベンを演じる。



DANNY AIELLO
as TONNY
トニー:ダニー・アイエロ

1933年、ニューヨークに生まれる。スタントマンをしていたが芝居の道に転出。30代半ばのデビュー作 "Lampost Reunion" で即座にシアター・ワールド賞を受賞し、キャリアに弾みを付けた。正式な演技のトレーニングを受けないまま数々の舞台に登場し、"Gemini" ではオビー賞を、81年には "The Floating Light Buld" ではエミー賞を獲得している。73年には映画への初出演を "Bang The Drum Slowly" で果たし、翌74年には『ゴッドファーザー PARTⅡ』(フランシス・フォード・コッポラ)への大抜擢を受ける。80年代に入り『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』(87、セルジオ・レオーネ)、『カイロの紫のバラ』(85)、『ラジオ・デイズ』(87、共にウディ・アレン作)、『月の輝く夜に』(87、ノーマン・ジュイソン)等の秀作への出演が続き、ニューヨークを拠点として活躍する貴重なバイプレイヤーとして名監督達と共に仕事を熟す。そして、89年には議論を巻き起こしたスパイク・リー監督作『ドゥ・ザ・ライト・シング』でのイタリア系のサル役でアカデミー賞、ゴールデングローブ賞両賞の最優秀助演男優賞にノミネートされ批評家たちからも大絶賛を受けた。その後もロバート・デ・ニーロやリチャード・ドレイファス等との共演が続いている。また、積極的にチャリティー活動に参加していることも彼の人柄の現われだろう。

LEON
CAST STAFF



LUC BESSON
DIRECTOR & WRITER
監督・脚本:リュック・ベッソン

『レオン』でアメリカ映画製作に進出したリュック・ベッソンは、1992年に『ニキータ』がアメリカで公開され批評家や一般大衆から絶賛された時に、自分の初のアメリカ映画を作るというアイデアを探究し始めた。オーバーで迫力があり動きが早いというアメリカ映画の特色を備え、それでいてヨーロッパ映画らしさとユーモア、リアリティーが注入されているこの作品は、ベッソンが独自の路線を行くフランス人の映画製作者だけで終わらせないことを決定づけている。

1959年3月18日、パリに生まれたベッソンは、17歳のときに中等学校を中退、半年後ゴーモン社でニュース映画のアシスタントとして働き始めた。1978年、ハリウッドへ渡り映画の手伝いをする。大好きなアメリカ映画『カッコーの巣の上で』(75)がベッソンを映画監督への道に進ませた。フランスに戻ったベッソンは、自分自身の製作会社 "Les Films Du Dauphin" を設立し、今では自分の全ての映画の脚本を書き、プロデュースし、監督を務めている。

デビューは1982年のアヴォリアッツ映画祭に出品した短編『L' Avant Denier』。この作品が注目され、翌83年には処女長編『最後の戦い』で同映画祭審査員特別賞と批評家賞を受賞する。パリの地下鉄構内を舞台にした『サブウェイ』(84)はセザール賞に輝き、長編第3作『グレート・ブルー』(88)そして『グラン・ブルー〜グレート・ブルー完全版〜』(88)『アトランティス』(91)はフランスのみならず日本でもカルト的大ヒットとなる。その当時、妻であったアンヌ・パリロー主演、女殺し屋『ニキータ』(90)は、『レオン』の元となる、誰にも真似の出来ないベッソン流アクションを生み出し、彼の代表作品となっている。

鉄分III

●荒川洋治

機械をあつかってみましたか。現実にいちばん近い機械に。調べました。ぶつかりました。もうたくさん、というほど銃身の横でよく理解しました。そこはしかし廊下だらけです。誰かの手ではない。自分の冷たい手で、顔を洗い、冷たい牛乳をのみ、都会人らしく少し考えて、いちもくさんに廊下を通り、人間になっていきます。すべてののみものは、小さなスカートをかかえ、廊下をくだる。そのとききれいな帯のように、世界が見えます。少しおもい、少しかるいとつぶやきながら、それでも続きの廊下を通り、谷と崖に落ちていくわたしは攻撃ではない。誰かとわたしのため落ちていく鉄分。ただの続きの廊下を。風貌のまま。




LEON

LUC BESSON

リュック・ベッソン、その無垢な瞳の向こうに…

●河原晶子



ジャン=ジャック・ベネックスとイザベル・パスコ、レオス・カラックスとジュリエット・ビノシュ、そしてリュック・ベッソンとアンヌ・パリロー。80年代に華々しく登場したフランスの若き映像派世代の映画監督三人と、彼らの“ミューズ”となった主演女優たち。彼らが映画作りの中でも、また私生活の中でも恋愛関係にあったことは、今ではもうほとんどの映画ファンなら知っている。彼らもまたやっぱり、大先輩であるジャン=リュック・ゴダールやフランソワ・トリュフォーや、そしてロジェ・ヴァディムなどと同じように、女優に恋をすることでその恋のマジックによって素晴しい創造を行なった、フランス人の恋の特権を生きた映画作家たちだったのである。

しかしそれにしても、例えばロジェ・ヴァディムのような成熟した恋のプロフェッショナルに比べて、ベネックスやカラックスやベッソンには、まるで大人の男と少年のような違いがある。中でもベッソンの映画における永遠の少年性は、ベネックスやカラックスを抜きんでたものがある。ベネックスやカラックスに、かすかではあってもあのヌーヴェル・ヴァーグ派の大先輩たちの後継者としての恋愛美学への憧憬がみえるのに対して、ベッソンの描く恋はそうしたフランス的なる官能とは無縁の、純粋にそれ故に哀しい初恋の味を持ち続けるのである。

アメリカ人が、そして日本人である私たちがリュック・ベッソンの映画を愛するのは、おそらくそんな彼の無垢な少年の心にあるのではないだろうか。おそらくベネックスやカラックスは、もしアメリカに招かれて映画を作ったとしても、彼らと真っ向から対立してしまっていただろう。しかしリュック・ベッソンだけは、あの愛すべきテディ・ベアのような風貌と個性とで、ハリウッド映画人をいともたやすく魅了してしまうのである。

リュック・ベッソンがデビュー作の時から描き続けるのは、そうしたピュアな子供の夢である。ベッソンの映画の世界を生きるのは、現実から逃避して自ら想像の中に築きあげたユートピアの世界に遊ぶことしかできない永遠の子供たちだ。パリのメトロの地下世界に住みついた夢見る世捨て人たちを描いた「サブウェイ」、恋人との現実の生活よりも、海の底でイルカと生きることを選んでしまう青年を描いた「グラン・ブルー」、そして愛に飢えながらも愛に反抗して孤独に生きるしかない“泣き虫の殺し屋”のヒロインを描いた「ニキータ」。「サブウェイ」でクリストフ・ランベールに、「グラン・ブルー」でジャン=マルク・バールに、おそらく彼自身の分身を反映させてきたにちがいないベッソンは、「ニキータ」ではじめて彼にとっての“ミューズ”を登場させた。しかし、ここでもまたヒロインは、彼の女性へのオマージュというよりは、性のちがう彼自身の分身なのではなかっただろうか。



◆リュック・ベッソン フィルモグラフィー◆

最後の戦い(83) 主演：ジャン・ブイーズ、フリッツ・ウェッバー
台詞を排した斬新な作風で高い評価を受けたデビュー作

サブウェイ(84) 主演：クリストファー・ランバート、イザベル・アジャーニ
米欧のスターを起用し犯罪アクションに挑戦

グレート・ブルー(88)
グラン・ブルー グレート・ブルー完全版(88)
主演：ロザンナ・アークエット、ジャン・マルク・バール
ビデオ化されてから熱狂的なファンを多数獲得した名作。

ニキータ(90) 主演：アンヌ・パリロー、ジャン・ユーグ・アングラード
当時のパートナー、パリローと組んで大ヒットを記録。

アトランティス(91)(海の生物)
「グラン・ブルー」に続き、海への深い愛情を綴ったイメージフィルム。

そして、そんなベッソンの分身たちである“永遠の子供たち”にとっての、父親的・兄貴的な保護者としての役を果たしてきたのが、デビュー作からずっとベッソンの映画に出演しつづけてきたジャン・レノである。もっとも「ニキータ」では、そうした大人の男のイメージはむしろヒロインの上司を演じたチェッキー・カリョが引き受けていたのだったけれど…。

リュック・ベッソンとジャン・レノ。まるで魂の兄弟のようなこのふたりの男たちの関係は、映画の中でいつもそうした永遠の少年の夢を生きる主人公と、そして同じ夢を生きる主人公の保護者(父親)の関係を実らせてきた。そして今度はじめて、ベッソンはジャン・レノを主人公にして映画「レオン」を作った。ベッソンの世界の主人公を演じることで、果たしてジャン・レノはベッソンの保護者からベッソン自身の分身へと役どころを代えたのだろうか?じつはイエスでもあり、同時にノウでもある。他者との密なる関係を拒絶して、観葉植物だけに愛を注ぐ孤独な男レオンは、明らかにこれまでのベッソンの映画の主人公たちと同じ“永遠の少年”である。しかし同時にレオンは、愛に飢えながら愛に心を閉ざした少女マチルダの父親的存在であり保護者的存在でもあるのだ。ここではマチルダはいうまでもなく「ニキータ」のヒロインの分身、あるいは少女時代である。

「サブウェイ」のクリストフ・ランベール、「グラン・ブルー」のジャン=マルク・バールから、「ニキータ」のアンヌ・パリロー、「レオン」のナタリー・ポートマンへと、主人公をヒーローからヒロインへと移しながら、ベッソンは性を超えていつもきっと同じ人間、すなわち彼自身の分身を追い続けているのではないかと思う。ニキータもマチルダも、きっとベッソン自身、性をとりちがえたベッソンの分身なのだ。彼自身の分身としての女性に恋する男、それはことばを換えていうならば、いつまでも成熟を拒絶する永遠の少年である。そして思い出してみるならば、それはジャン=ジャック・ベネックスの、レオス・カラックスの恋愛志向にもかすかにみてとれるものだ。恋の熟練者であるはずのフランス男にも、今ではそうしてかつての“官能”を喪失した孤独なセクシュアリティが蔓延してしまったのだろうか?

リュック・ベッソンの素顔は、あの愛すべき大らかな体格の中で澄みきった瞳だけがなぜかいつも哀しげにみえる。彼の映画の音楽楽をすべて手がけてきたエリック・セラは、彼にはほとんど私生活がない、隠しているのか、本当にないのかもしれないが、仕事以外の部分の見えない男だ、と語っている(プレスより)。ワイルドでエネルギッシュで、いつもみんなに愛されてしまう巨漢リュック・ベッソン。しかし彼の素顔はきっと、彼の映画そのもののように、純粋で、そして少しもの哀しいものなのかもしれない。





LEON

純粋な愛へのレクイエム

●山口直樹

情報があふれ、あらゆる欲望が渦巻く都市においては、もはや、真に根を張って生きることも、純粋な愛を育むことも、すべてが幻想なのかもしれない…。リュック・ベッソン監督が、ニューヨークを舞台に、異常な状況で芽生えた純愛が巨大な悪に翻弄される様を描いた「レオン」は、見終わったあとでそんな思いに包まれる。

ニューヨークの裏社会で凄腕の殺し屋としてならすレオンは、イタリア移民で、ただ生きるために殺し屋になってしまったような男。あらゆる感情を自ら排し、簡素なアパートで、自分と同じように大地に根を張ることができない鉢植えの観葉植物を唯一の友としてひっそりと暮らしている。

一方、レオンの隣の部屋で家族と暮らす12歳の少女マチルダも、家庭に自分の場所はなく、誰かに愛されたいと願いながら漂うように生きている。

そんなふたりが、マチルダの家族が麻薬がらみで惨殺されたことから一緒に暮らし始め、生きる喜びを知り、性を超えた純粋な愛で結ばれていく…。

このふたりの根を張って生きられない姿を、ベッソン監督は、さまざまな映像でさりげなく浮き彫りにしている。

たとえば冒頭、ニューヨークの街をスーッと進み、レオンが仕事の依頼を受けているリトルイタリーのレストランに吸い込まれるように入っていくカメラの視線。人の目線よりは高いが、上から眺めるというには低く、ちょうど都市を浮遊しているような感覚を微妙に与える。エリック・セラの不安をかきたてるような物悲しいサウンドも効果的だ。

素早く、正確に標的を倒していくレオンの得意技が、コウモリを思わせる“ぶら下がり戦法”であることも、浮遊感を感じさせる。

また、印象深いのは足をとらえた映像だ。レオンがはじめてマチルダと出会うシーン。手摺りから空間に投げ出されたマチルダの足をアップでとらえ、行き場のない不安定な精神状態を巧みに示している。

そして、4歳の弟まで殺した悪徳捜査官スタンフィールドに復讐しようと麻薬取締局に乗り込み、逆に捕らえられたマチルダを凄まじい早業で救出したレオンが、彼女をはじめて抱き締めるシーン。カメラは、しっかりと地に足をつけてマチルダを抱き上げるレオンの足をはっきりと映す。マチルダと共に根を張って生きようと決意したレオンの熱い思いが、このカットから強烈に伝わってくるのだ。

もちろん、ふたりの微妙な心の変化を見事に演じたジャン・レノとナタリー・ポートマンの演技も素晴らしい。

特に、これがデビュー作というポートマンの圧倒的な存在感はどうだろう。12歳の少女の持つ幼さのなかに、ときおり大人の女の匂いを感じさせる表情を見せ、ドキッとさせられる。化粧をしてマドンナやモンローの真似をするマチルダに女を感じ、まともに見つめられずに目をそらし気味にするレオンの反応もうなずけよう。

それが、レオンと別れるシーンでは、まるで小さな子供のように泣きじゃくるからいとおしい。天才少女の出現として、「タクシー・ドライバー」のジョディ・フォスター以来の衝撃を受けた。

ポートマンの鮮烈さに比べ、やや地味な印象を受けるジャン・レノだが、少年の心をもった寡黙な殺人マシーンという難しい役を、表情と少ない台詞で実に巧みに演じている。

惨劇の直後、涙を浮かべながら、殺された姉を痩せることしか頭にない豚だったとなじるマチルダに、「豚を悪く言うな」と、豚の鍋つかみで笑わせるときの笑顔の優しさ。不器用なまでに純粋な心を秘めていることが一瞬にしてわかるのだ。

また、レオンが、徐々に人間的な感情に目覚めて苦悩していく姿も切ない。殺人マシーンの冷静さにひびが入り、殺しで傷を負ったレオンが、マチルダに照れくさそうにドレスをプレゼントした後、胸に刺さった何かの破片を摘出しながら痛さにあえぐうめきは、そのまま心の痛みとして響いてくる。

だが、そんなふたりの純粋な愛を際立たせているのは、スタンフィールドを演じるゲイリー・オールドマンの強烈な怖さだろう。

マチルダの家族を惨殺するシーン。ドアの前で、クスリ(おそらく興奮剤)のカプセルをグキッと背中をよじりながら噛み砕き、陶酔の表情を浮かべるや、ベートーベンを聞かせてやろうと部下に言っていきなり銃をぶっ放す。そして、殺人序曲を指揮するように手を振りながら、母や娘をちゅうちょなく射殺していくのだ。

こんな狂気に満ちた悪役が、かつていただろうか?このオールドマンの迫真の演技があったからこそ、あまりにも劇的で特殊なふたりの純粋な愛も、常識では考えられないクライマックスの壮絶な戦いも、すべてがリアリティをもって素直に受け入れられたのだ。

さて、自らを社会から隔離し、感情や欲望を封印してきたことで、レオンは心の奥底に純粋さを持ちつづけられていた。が、マチルダと出会い、その心を開き、今までの生活と決別しようと決意したとき悲劇に見舞われる。

マチルダを救うためにレオンがドアを開けたときにあふれた生と希望を象徴するような陽光を、レオンは、ついにつかめないままスタンフィールドの銃弾に倒れる。

この皮肉な結末によって「レオン」は、現代社会から失われつつある根を張る暮らしや、純粋な愛へのレクイエムとなったのだ。

ラスト、レオンの分身ともいえる鉢植えの観葉植物を大地に植えるマチルダの姿をとらえたカメラは、脇の大木に沿って上昇し、やがて、緑と川の向こうにニューヨークの摩天楼を映しだす。そのとき、ニューヨークは、まるで浮草のように水に浮かんだ“浮遊都市”に感じられるのだ。



JEAN RENO



記者会見記

●川口敦子



一月の朝の寒気の中で大男と少女は腕をからめ、小声で何かを囁き合い、無邪気な笑い声をあげる。親子でもなく、無論、夫婦でもなく恋人同士というのでもない奇妙なふたりの光景が、肌をさす冷たい風を忘れさせる。

新しい年の初めに立ち合ったジャン・レノとナタリー・ポートマンの東京での再会の場にはそんな温かな信頼の関係が否応無しに滲みだしていた。リュック・ベッソンが盟友レノのために書いた『レオン』。鉢植えの観葉植物を友としてニューヨークにひとり生きる孤独な一匹狼の下に隣の少女が転がりこみ、弟子入りを志願してあっけなく始まる愛の物語をレノと同等の存在感で支えた12歳のファム・ファタールが２千人の応募者の中から選ばれた新星ポートマンだ。

「象の群れを思い出してみて欲しい。親象は子供たちを群れの真ん中に置いて進んでいく。そこからはみ出した時だけ鼻先で子象を突いて連れ戻すけれど、そうでなければうるさく干渉することはない。ナタリーとの共演で心がけたのはこんなスタンスをとることだった。彼女にとっては初めての映画出演だからいろいろ難しいこともあったろう。だけど、いちいち僕がしゃしゃり出て注意するような真似はしたくなかった。本当に必要な時だけ進路を指し示せばいいのだから。動物と子供を相手役に選ぶなってショウビジネスの諺はもちろん知っている。でも、ナタリーをいわゆる子役として見てはいなかった。だから食われる心配なんてものも要らなかった。彼女はひとりのプロフェッショナルとしてきちんとした仕事をし、スターの風格を備えていた。特別の友人といえる関係が築けたと思う」

対等の関係を強調するレノの言葉はそのままレオンとポートマン扮するマチルダとの愛にもあてはまる。「40歳の少年と12歳の大人」とふたりを説明するポートマン自身は現在13歳。「地元のピザ屋でスカウトされた時、私がなりたいのは女優でモデルじゃないわといった

NATALIE PORTMAN



の」と振り返る言葉が縁取る気丈さがマチルダ役へのふさわしさを思わせる。家族につまはじきにされていた少女は、一家を皆殺しにされる以前から孤独を噛みしめ、精一杯の強がりで体を強ばらせている。荒んだ家庭が突然の殺戮の現場となった時、悲鳴も涙も裡に抱えて隣室のレオンのドアを叩く彼女にとって、開かれた扉の先に広がる世界はいっそ、ひとりで生きる恐怖よりは既に充分、知り尽くしたひとりぼっちの辛さからの解放を指し示しているようにもみえる。

そうやって迷いなくレオンとの対等な愛の世界に踏みだす少女。彼女を演じるために長いカーリーだったという髪をオカッパに切り揃え、女優という別世界に飛び込んだポートマンは「髪を切るなんて別に大したことじゃなかった」ときっぱり言い放つ。

「髪型を変えることでマチルダという役に入り易くなったし、まったく別の外見をもったことで、逆にいつもの自分に戻るのも楽になった。撮影のために休んだ授業の遅れは一対一の補習を受けて二日間で取り戻せたわ。大変だったりはしなかった。前からテストの時でも時間が余ってしまって退屈な思いをすることが多かったのね。今度の体験で学校って本当に無駄な時間が多い所だったんだと気づいたわ。もっと集中して授業を終えて、下校時間を早くしてくれれば遊びの時間だってたっぷりとれるでしょ。子供らしく過ごせる時間が増えるのにね」

子供らしさを惜しむ言葉が微笑ましい少女は「映画に出たことで将来、自分の子供に13歳の頃の私を見せてあげられるのがうれしい。ハリウッドのキッズ・ムービーでデビューするはめに陥らなかったのも幸運だったと思う。だってあと二年もしたら可愛い子役では通用しなくなっていた筈だもの」などといった発言もきめて、あくまで前をみつめている。もっとも取材の席では弱音を吐かない彼女も撮影後、学校で女優になったと特別扱いされ、居心地の悪い思いをしたのだと監督ベッソンはいう。

「一度、僕に電話をかけてきてね。ちょっと泣き言をいっていた。でも転校してまた、普通の暮らしに戻れたというからよかったと思っているんだ。彼女をヒロインに選んだ理由のひとつが、こういうインパクトの強い役を演じた後でもそれに左右されずに自分の世界に戻り得る健やかさを身につけているって点にあったのだから。女優になりたいという気持ちの奥には自分の居る環境を逃げだしたいって願望がある場合も多いんだけど、ナタリーの場合には自分を見失うのではって心配は無用だった」

若くして注目を浴びることの不幸を仏映画界の恐るべき子供として体験したベッソンの、ポートマンに向けた気遣い。同様の大きな愛に満ちた眼差しを彼に注ぐのが『最後の戦い』以来、ベッソン組の常連となったレノだ。『レオン』への愛着が強まって脚本のみならず自らメガホンを握ろうと決意を固めたベッソンが当初のアイディアを覆し、別の主演俳優の可能性を探った事実をレノは「監督として当然のこと」と述懐する。

「迷いや疑問を無視してまでも友情を尊重するなんて間違っている。リュックと僕との友情はそういうもの。撮影現場には監督と俳優の関係以上のものを持ち込まない。友人としていつもべたべたするよりはお互いに謎の部分を残してつきあう方がいい。今はこんな仕事を考えている。じゃあ、僕を使ってよ。といったことが続けば友情も仕事もうまくいかなくなる。もちろん、基本的には惹かれあい、信頼しあっているんだ。でなければ撮影の間、何ヵ月も一緒にいられない。繰り返し組むこともできないだろう」

将来への野心も展望もなくただただお互いを必要とする気持ちをみつめる『レオン』。映画の背後に流れるのも人と人との厳しく温かい思いといってよさそうだ。

LEON
DIALOGUES

「タバコか？」
「バレたら大変　パパにお仕置きをされるわ」
「どうした」
「転んだの　タバコのことは内緒に」

「大事なの？」
「最高の友さ　無口だからいい　俺と同じで根がない」
「大地に植えれば根を張るわ　私もあなたの鉢植え？」
「そうさ」

「初心者はライフルがいい　標的と距離を保てるからな　腕が上がれば標的に接近できる
ナイフがそのいい例だ」





ERIC SERRA MUSIC
音楽：エリック・セラ

エリック・セラが映画のスコアを手掛けるようになったのは、リュック・ベッソンが自分の最初の映画『最後の戦い』のために曲を書いてくれと頼んだ時からだった。それからすべてのベッソン映画の音楽を担当しており、セラの映画のサウンドトラックの多くはフランスでゴールドディスク、プラチナディスクの売上げを記録した。

1959年9月9日、パリに生まれる。5歳でギターを弾き始め、15歳でロック・バンドを結成、17歳でプロのギタリストとなった。

1985年『サブウェイ』でセザール賞にノミネート、1988年『グラン・ブルー』で同賞、ベスト・サウンドトラック賞、グランド・プライズ賞を受賞した。1990年『ニキータ』でベスト・サウンドトラック賞、1991年『アトランティス』で再び同賞を手にしている。

また映画のための作曲活動に加え、Jacques Higelin Pierre Meigeなど、何人ものフランスの一流音楽エンターティナーともレコーディングをしている。セラは現在、初めてのソロ・アルバムを制作中である。

エリック・セラ・インタビュー
ひとつの種を育てて。

凱旋門を斜めに見渡す通りに建つホテル。どこまでも厳めしいロビーの空気をひらりと躱してエリック・セラはつぎはぎのジーンズに詰め襟の学生服でパンク少年然と現われた。

「新宿のデパートの制服売り場で5着まとめ買いした学生服は世界のどこでもエレガントと好評、なのに日本人だけは笑いものにするんだよね」とまずは爆笑。だが、盟友リュック・ベッソンとの最新コンビ作『レオン』の話となるとすっと表情を引き締めた。

「今回の音楽には様々なスタイルが混じりあっている。アフリカのパーカッション、アラブ風のメロディ、それにラベルやドビュッシー等、フランスのクラシックの影響もある。混沌とした印象はコスモポリタンな都市ニューヨークから出てきたもの。映画の舞台となるあの街の摩天楼を見て最初に抱いたのが巨大な最先端都市の遺物って感じなんだ。かつて世界で一番モダンだった街が古ぼけて朽ち果てようとしている。で、連想したのがピラミッド。それがアラブ風の旋律につながった。最近ではニューヨークときたらラップっていうのが殆どクリシェのようになってるじゃない。あれだけはやりたくないと思った」

『グロリア』を思わせつつも次第に『ニキータ』の方へと、つまりは“恋のノワール”へとにじり寄る『レオン』で、異邦人ベッソンが切り取るニューヨークは、スクリーンで見慣れた景色をはみだし、目新しさと懐かしさとの奇妙なミスマッチを差し出してくる。そんな監督の目をぬかりなく請け負って世界を完璧にするセラのメロディ。

「僕にとって『レオン』はなによりもロマンティックな愛の物語なんだ。今回は特にエモーションをかきたてる音楽のつけ方を心がけた。アクション・シーンにしても､それだけでは単なる暴力にすぎないものが音楽が感情に働きかけることで別のものになる」

「リュックの頭の中に蒔かれたのと同じ種を僕も育てていくってかんじかな」と共同作業を説明するセラはまた「まずリュックの世界がある。あくまで彼の映画のための音楽」と自身の仕事を位置づける。共に59年生まれのベッソンとセラが出会ったのは18歳の時。レコーディングを見学するためスタジオを訪れたベッソンがギター奏者を務めるセラに目をとめたのがコンビ誕生のきっかけになった。数週間後、ベッソンがてがけたミュージック・ビデオにセラはベーシストとして参加。水のないプールで撮影されたこの初仕事以来、ベッソンの全作に音楽を提供してきたセラだが映画音楽の専門家という意識はない。準備中のソロ・アルバムではバンドを率いて歌う予定。そんな演奏活動をキャリアの軸にしていきたいのだという。

「映画に特別の興味をもったことはない。たまたまリュックという音楽に重きをおいてくれるフィルムメイカーと仕事をするのが好きなだけでね。『サブウェイ』の後でちょっと興味をもって彼以外の監督作に手を出して、ああ、やっぱり僕は映画音楽ではなくリュックとの仕事をしたいんだと気づいたんだ」

もっともベッソンとの関係はいたってクールなものらしい。「彼には殆ど私生活がない。隠してるのか、本当にないのかよくわからないけど、とにかく仕事以外の部分を見せないんだ。ジャン(・レノ)と僕が彼の一番の親友なんで、普通だったら家族ぐるみの交際になるよね。実際、ジャンとは週に2、3回は会って食事をする。でもリュックは違うんだ。仕事がなければ会わないし、仕事が終われば さっさと帰ってしまう。イルカじゃなく妻と子がいる家だと思うけど（笑）」

とはいえ「コミュニケーションが苦手。音楽でなら言葉よりも何かを確かに伝えられる気がする」とセラが語るのを聞けば台詞を排したデビュー作『最後の戦い』以来、コミュニケーションに拘る(こだわる)ベッソンとの絆にも納得がいく。言葉を超えた世界を補いあう映像と音楽。その結びつきは最新作でも美しい花を咲かせている。







LE






ON




PRODUCTION NOTES

■全米で、フランスで驚異の大ヒット！

映画『レオン』は、リュック・ベッソンのワールド・ワイドな製作進出として大きな期待を集め、全米で11月18日、1,158館というフランス人監督作品としては異例の拡大公開体制で幕を切った。

また、これに先駆け9月14日にはフランスで公開されたが、ここでも初登場No.1に輝いた。パリおよび郊外44館（フランス全土で255館）で封切られ、観客動員数243,285人。同じく初登場で2位についたジャック・ニコルソン主演作品『ウルフ』の142,681人（パリ53館／フランス380館）を大きく引き離しての大ヒットで、パリではこの期間に映画を見た人の実に3人に1人が、『レオン』を見た計算になる。

ちなみにハリウッドで『アサシン』としてリメイクされた『ニキータ』は、パリでの公開週動員が113,900人（29館）。『レオン』はそれまでのベッソン作品のなかでも驚異的な大ヒットとなった。出演者の一人ゲイリー・オールドマンは、「『レオン』は、大規模で、パンチがきいていて、展開の早いアメリカ映画でありながら、そこにヨーロッパ映画の要素とユーモアを注いだことで、ありきたりでない、素晴らしい作品になったと思う」と語っている。主演のジャン・レノは、「アクションに常に感情や愛をからめて脚本を書き、撮影するのがベッソンのやり方なんだ。アクションのためにアクション映画を撮るということはしないのさ。」と言う。

ベッソンは、この作品をアクション映画と認めながらも、登場人物と、彼らの相互作用から生じる感情や笑いも同じくらい大切だと言う。「あくまで僕なりの考えだが、ユーモアのない映画は、映画とはいえないんじゃないかな。」



■小さな大女優ナタリー・ポートマン誕生！

今回のキャスティングで一番難航したのは、12才の少女マチルダ役だった。ニューヨーク、シカゴ、ロンドン、パリと2,000人を超える少女たちと会った後、ベッソンとキャスティング・ディレクターは彼女を見つけた。

ベッソンは言う。「最終審査には6人が残りましたが、彼女はずば抜けて素晴らしかったのです。セットに到着したときには、彼女は茶色の長いカーリー・ヘアでした。僕たちはどちらかと言えばマチルダ役にはルイーズ・ブルックス風の、とても暗い感じを思いつきました。彼女の母親が初めて見たときには、死にそうだったんじゃないかと思いますよ。しかし、ナタリーは大喜びで変身しました。」

共演のレノはナタリーを評して語る。「彼女は素晴らしく、チャーミングで、賢くて、才能に恵まれている――完璧にね。」そんな彼女の、本作でのもっともお気に入りの場面は、マチルダの家族が殺された後、レオンが彼女を引き取って世話を焼き始めるところだという。

「それは彼女が自分の家族とでは味わえなかった体験だったの。そうして彼女は、自分が以前よりずっと素敵な自分になっていることに気づいていくのよ。」

こうして映画初出演ながらまさに完璧にベッソンの期待に応えた驚くべき小さな大女優が誕生したのだ。



■ベッソン・ファミリー再び

『最後の戦い』に始まるベッソン一連の映画では、いわゆるベッソン・ファミリーのメンバーが常にベッソンの世界を創り上げるのに一役買ってきたが、今回の『レオン』でも、彼らが再び大活躍している。

身長1メートル87センチのジャン・レノは旧友とニューヨークで仕事をするというアイデアも気に入って即座に仕事を引き受けた。ベッソンとレノが初めて出会ったのは、ベッソンがあるフレンチ・コメディの小品のアシスタントをしていたときだった。レノは当時を回顧して、「彼は僕を呼んで短編映画を作ろうと誘ってきた。なぜだか分からないけど僕はイエスと返事をしてしまった。すると彼が、『ギャラは払えないよ』と言うので、じゃあいやだと言った。そのあと彼は1,000フラン（200ドル相当）を提示してきたんだ。このまったくただ同然のギャラに、僕はウィ、と言ってしまった。どうしてそんなことをしてしまったのか、いまもって分からないよ。」

以後ふたりは、『サブウェイ』('84)『グラン・ブルー』('88)など、数々の作品でコンビを組んできた。そして本作では、18歳の頃からベッソンの友人であるエリック・セラもまた、それまでと同様に、ベッソンのアクションに感情を喚起させる素晴らしい音楽を創りだした。

さらに旧知のスタッフが勢ぞろいする中、ハリウッド・スターのゲイリー・オールドマンが脚本を読まずして快諾し、ナタリー・ポートマン、ダニー・アイエロというキャスティングが加わって製作はスタートした。



LEON



A LUC BESSON FILM

LEON

JEAN RENO GARY OLDMAN NATALIE PORTMAN DANNY AIELLO



A GAUMONT/LES FILMS DU DAUPHIN PRODUCTION

A LUC BESSON FILM

"LEON"

JEAN RENO

GARY OLDMAN

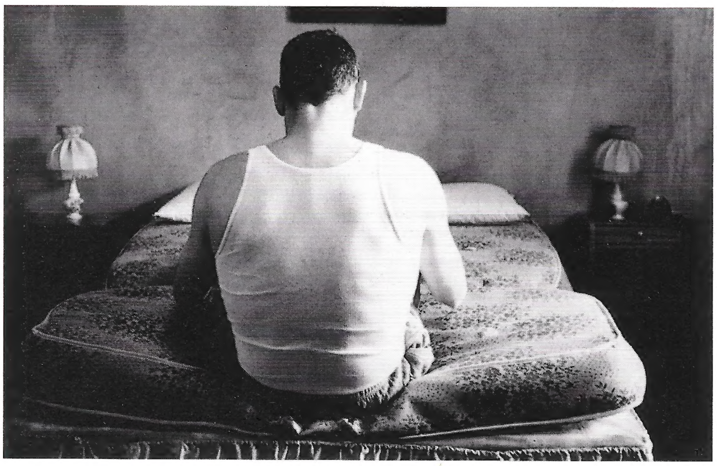
NATALIE PORTMAN

DANNY AIELLO

MUSIC BY ERIC SERRA

ORIGINAL SOUNDTRACK:EPIC/SONY

WRITTEN & DIRECTED BY LUC BESSON



製　作
ゴーモン／レ・フィルム・デュ・ドーファン・プロダクション

出　演
ジャン・レノ
ゲイリー・オールドマン
ナタリー・ポートマン
ダニー・アイエロ

音　楽
エリック・セラ（オリジナル・サウンドトラック：エピック・ソニー）

脚本・監督
リュック・ベッソン

ノベライゼーション〔原作・脚本：リュック・ベッソン　著者：岡山 徹〕
3月4日発売　定価1,600円(税込)　ソニー・マガジンズ刊

■平成７年３月25日発行　■発行承認／日本ヘラルド映画株式会社　■編集・発行／松竹株式会社事業部　■定価500円（税込み）

本誌掲載の記事・写真等の無断複製・複写・転載等を禁止します。

THE SHAPE OF MY HEART

by Sting & Dominic Miller

HE DEALS THE CARDS AS A MEDITATION
AND THOSE HE PLAYS NEVER SUSPECT
HE DOESN'T PLAY FOR THE MONEY HE WINS
HE DOESN'T PLAY FOR SPECT
HE DEALS THE CARDS TO FIND THE ANSWER
THE SACRED GEOMETRY OF CHANCE
THE HIDDEN LAW OF A PROB-ABLE OUTCOME
THE NUMBERS LEAD A DANCE

I KNOW THAT THE SPADES ARE SWORDS OF A SOLDIER
I KNOW THAT THE CLUBS ARE WEAPONS OF WAR
I KNOW THAT THE DIAMONDS MEAN MONEY FOR THIS ART
BUT THAT'S NOT THE SHAPE OF MY HEART

HE MAY PLAYS THE JACK OF DIAMOND
HE MAY LAY THE QUEEN OF SPADES
HE MAY CONCEAL A KING IN HIS HAND
WHILE THE MEMORY OF IT FADES

I KNOW THAT THE SPADES ARE THE SWORDS OF A SOLDIER
I KNOW THAT THE CLUBS ARE WEAPONS OF WAR
I KNOW THAT THE DIAMONDS MEAN MONEY FOR THIS ART
BUT THAT'S NOT THE SHAPE OF MY HEART

AND IF I TOLD YOU THAT I LOVED YOU
YOU'D MAYBE THINK THERE'S SOMETHING WRONG
I'M NOT A MAN OF TOO MANY FACES
THE MASK I WEAR IS ONE
THOSE WHO KNOW NOTHING
AND FIND OUT TO THEIR COST
LIKE THOSE WHO CURSE THEIR LUCK IN TOO MANY PLACES
AND THOSE WHO SMILE ARE LOST

I KNOW THAT THE SPADES ARE SWORDS OF A SOLDIER
I KNOW THAT THE CLUBS ARE WEAPONS OF WAR
I KNOW THAT THE DIAMONDS MEAN MONEY FOR THIS ART
BUT THAT'S NOT THE SHAPE OF MY HEART

© 1993 MAGNETIC PUBLISHING LTD.
The Rights for Japan assigned to Virgin Music Japan Ltd.
JASRAC 出 9472762-401

